◎聖徳太子（574 - 622）（『三経義疏』を執筆。『法華経義疏』は自筆本現存。）

○（615年。現存する日本最古の書物）

１．「にをみて、かなるにりて、そのをしめよ。」

２．「してす、・、これ・、これ・なりと。

３．かなるにりて、そのをしめよ。してなること、のくせよ。」

（上の３行は法華経の本文。２と３は偈［詩句］の文。これ以下は聖徳太子の解説文）

４．には、にすることをむのにせざれ。

５．「」よりののは、の「」をす。

６．めの（２）は、「**をむの**」をかし、

　　の（３）は、にの「」をす。

７．うこころは、**のるにるがに、をて、のにきて、にをむなり。**（「顛倒」は、「本末転倒」に同じ）

８．にりぬ、「」は、なおに「の」にるべきことを。

○（弟子品）

９．「ただよ、ずしも、これするをとさざれ」（「維摩経」本文）

１０．（＝）、にたり。にのをえて、にれ、てをめんとす。

１１．もし「」なりとして、**（＝あれこれ）せざれば、のりてか、をぜん。**（若解**万境即空**、**不存彼此**者、何有身心而生散乱也）

１２．もし「これなり」として、ずることわざれば、にるとも、ちをぞれん。

１３．**にじて、るべきなく、くべきなし。**

１４．**これをづけて「」（＝坐禅）となす。**（**彼此倶亡**無山可入無世可避…　是名為宴）

１５． （＝）、をして、をてにる…、あにく「」（＝坐禅）とづけんや。のはをむることわざるをす。

●参考：聖徳太子が読んだ「維摩経」の解説本から「宴坐」（＝坐禅）の説明。

# １６．はに「をむる」なりとう。（宴坐梵本云摂身心也）

# 　　　（374-414）『』にある坐禅の説明。

# １７．のをうる、をにし、 （患身之喧動故隠身於山林）

# 　　のをうる、をにむる。（患心之馳散故摂心於一境）

# 　　　吉蔵（549-623）撰『維摩経義疏』にある坐禅の説明。

# １８．くくし。（無彼無此亦無中間）『維摩経』本文。

◎維摩経義疏（弟子品）

19. …

20. れにす、「**をけ、にきいてぶ。にとうべし**」と。

21. 、するは、**にはち、のなし**。

22. **もしく、のくすれば、とうべし**。

23. **、をし、ちをす。あにとわんや**。…

24. そのをけ、にくというをす。にいて、またつり。

25. に、**れにくというをす**。

26. に、「」より、**れをくというをす**。

27.「、、」というは、

28. には、のるべきく、のくべききをかす。

29. もしくのくならば、にこれにく。

30. 、ととのととをす。あにこれにかんや。…

31. 「」は、に、**れをくというをす**。…

32. …　…

33. **に、、・のし**。

34.**もしく、のくすれば、にこれ、にってすとうべし**。

35. **、はとなりとす。、ちにこれのなり**。